

## 第3章 石偶・線刻礫

### 1 石偶の発見

愛媛県上浮穴郡美川村（現、久万高原町）にある上黒岩遺跡から縄文時代草創期の「線刻礫」、すなわち線刻表現の石偶（資料番号1）が最初に見つかったのは1962年7月の第2次調査のときであった。その後1970年10月の第5次調査までの間にも出土し、現在13点に達している。しかし、そのうち正式に発表されたといえるのは4点にすぎない〔江坂・岡本・西田1967〕。

今回、報告書を作成するにあたってすべての資料に目を通した結果、毛髪、乳房、スタレ文、鋸歯文（スタレ文も鋸歯文もこれまで腰蓑とされてきたが、筆者はそうに考えないので、文様名で呼ぶことにした）、肛門など人をあらわす特徴的な表現から石偶とみなしてよい扁平な円礫13点、線刻は認められないが石偶と同じ扱いをうけていた可能性のある扁平な円礫4点、線刻はあるが何をあらわしているか判断できない棒状の礫3点を抽出した。

石偶を出土した地層は、上黒岩第9層が5点、第7層が2点、第6層が1点、他の5点は正確な出土層をつかめていない。第9層～第7層は縄文草創期前半、隆起線文土器の時期であるので、この時期が7点となる。第6層は縄文草創期後半、無文土器の時期であるので、この1点は問題である。第9層のものが転移した可能性もあるが、他とくらべると素材の形状、線刻の崩れが認められるので、無文土器の時期まで残存した可能性ものこしておいたほうがよいかもしれない。

石偶とは大きさも線刻もまったく異なる鋸歯文をほぼ全面に線刻した大型棒状の礫は、第6層からの出土である。第6層からは棒状の線刻礫がもう1点見つかっている。より単純な線刻をもつ棒状の礫は、第9層からも1点出土している。

第9層の炭素年代値は $12,420 \pm 60$  BP、 $12,530 \pm 40$  BP、今から約14,500年前で、明らかに更新世末に位置している。線刻のない同様の円礫4点は、第7層からまとまって出土している。第9層とほとんど同じ時期である。

第6層の炭素年代値は $10,085 \pm 320$  BP、今から約12,500年前である。2009年5月のIUGS-ICS（国際地質科学連合の国際層序委員会）で、更新世／完新世の境界年代は11,700年前と定められたので、第6層の線刻礫もまた更新世末までさかのぼる。

### 2 石偶の記載

本遺跡出土の石偶は、緑色片岩または結晶片岩の薄く平らな円礫の上半部に髪、乳房、下半部に複数の縦線からなるスタレ状の文様（スタレ文と略称）または複数の鋸歯線からなる横帯状の文様（鋸歯文と略称）、裏面の下半部に肛門を正面観で線刻表現したもので、素材の礫の形状にはいっさい手を加えないで作っているのが大きな特徴である（図205・206・207、表17）<sup>(1)</sup>。

1は、上半部に髪、乳房の表現がある。どちらも石の上端から始まり、髪の毛はそれぞれ4本の線からなる左右二つに分けて、U字形を二つ並べた乳房の途中までかかっている。髪の毛はもっと

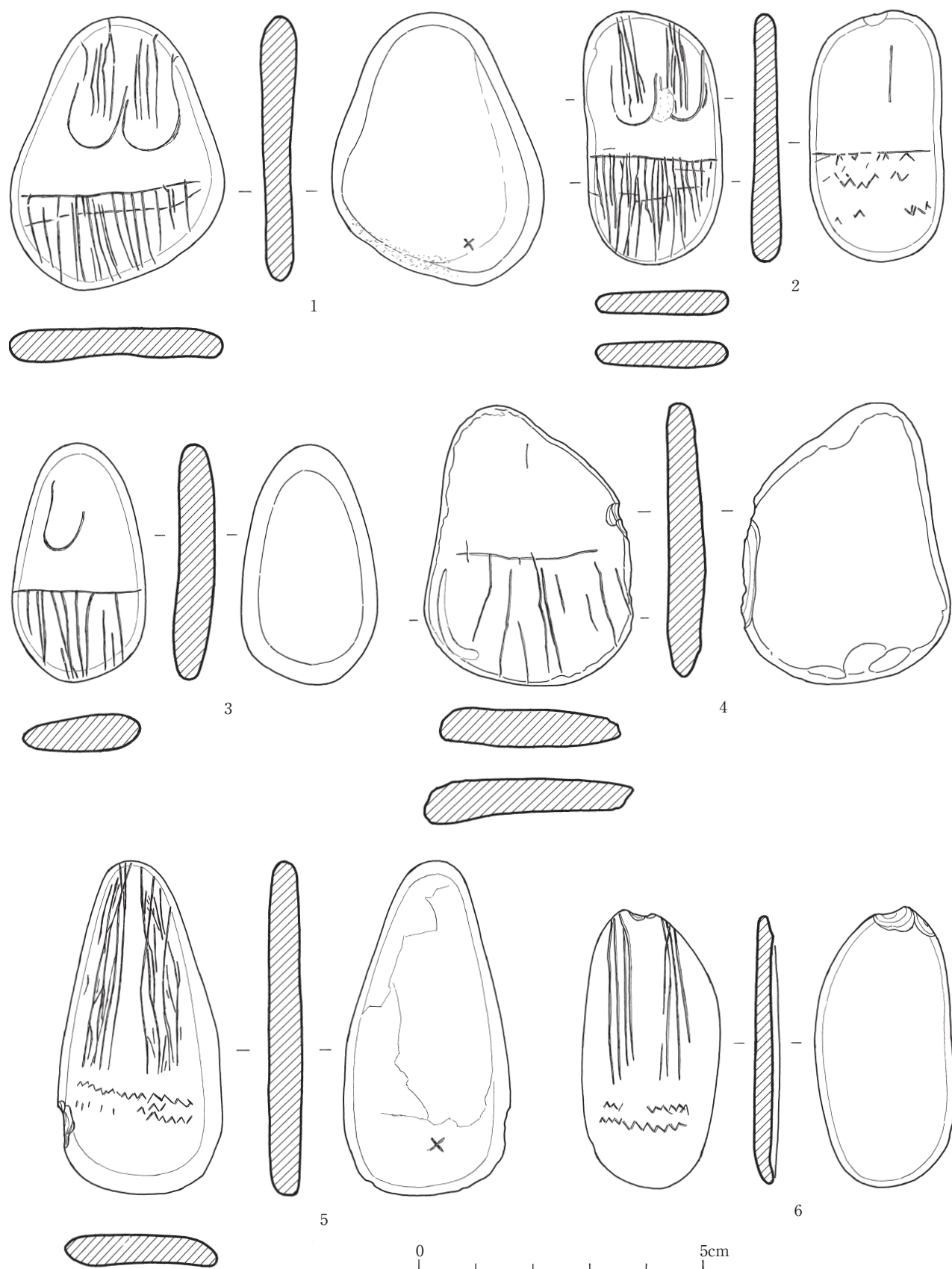


圖 205 石偶 1

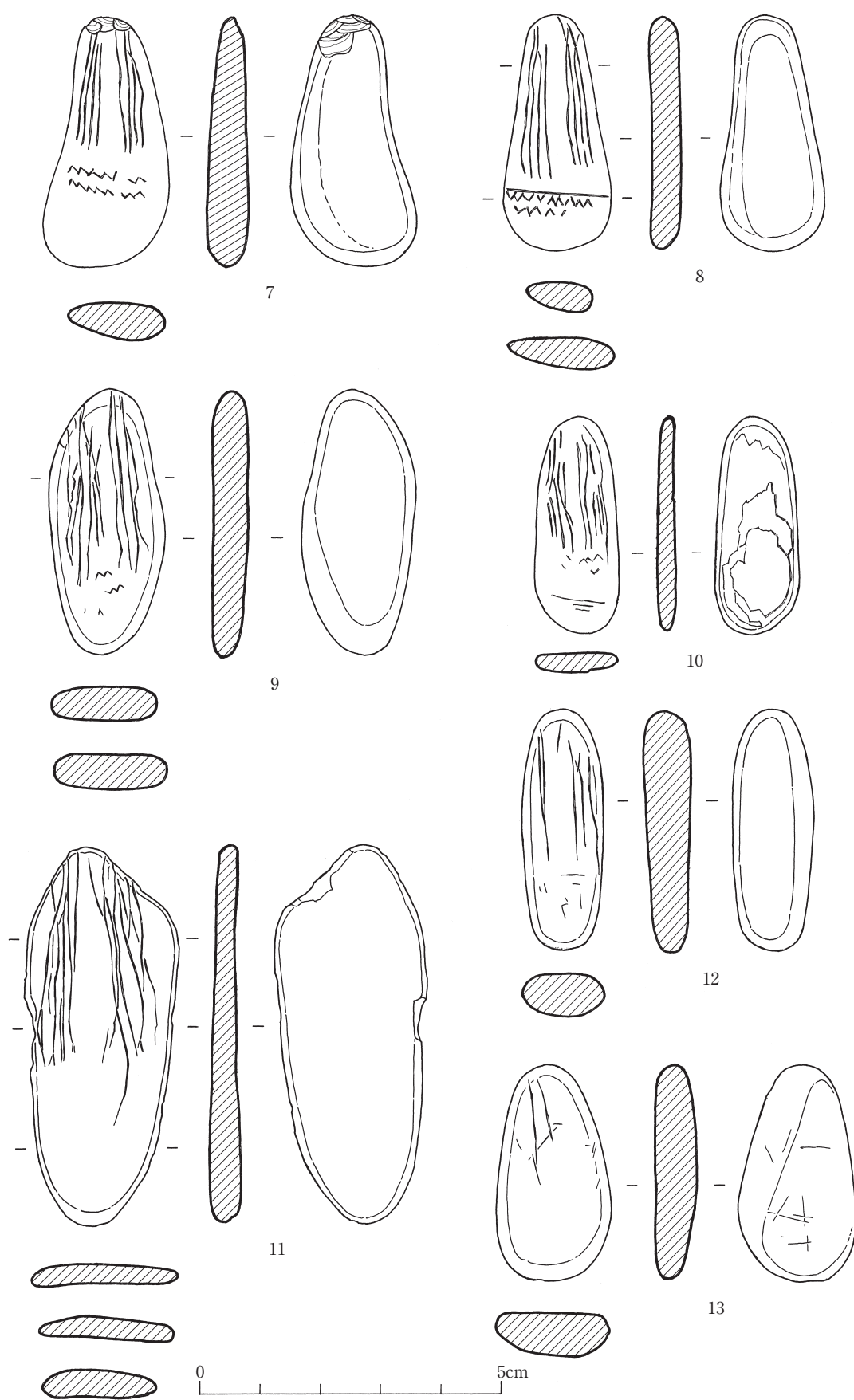


図 206 石偶 2

表 17 石偶・無線刻磔一覧表 (厚さはもっとも厚い個所, スダレ: スダレ文, 鋸歯: 鋸歯文の略)

番号	調査区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石 材	線 刻	保 管
1	2 次 D	9	4.70	3.82	6.5	20.47	緑色片岩	髪・乳房・スダレ・肛門	久万高原町
2	2 次 D	9	4.5	2.46	5.5		緑色片岩	髪・乳房・スダレ (表), 鋸歯 (裏)	歴博
3	4 次 A 3	7	4.16	2.4	6.8		緑色片岩	乳房・スダレ	慶大
4	4 次		4.5	3.7	6.6	21.2	緑色片岩	髪・スダレ	別府大
5	2 次 D	9	5.96	3.00	5.5	18.2	緑色片岩	髪・鋸歯・肛門	久万高原町
6			4.95	2.45	4.2	8.8	緑色片岩	髪・鋸歯	久万高原町
7			4.15	2.04	7.0	8.0	緑色片岩	髪・鋸歯	久万高原町
8	4 次 B・C	9	3.95	1.78	5.0	6.2	緑色片岩	髪・鋸歯	久万高原町
9	2 次 D	9	4.40	1.90	6.0		緑色片岩	髪・鋸歯	歴博
10	5 次 A	7	3.62	2.0	3.4		結晶片岩	髪・鋸歯	慶大
11	2 次 D	9	6.30	2.50	5.0		緑色片岩	髪	歴博
12	4 次 A	6	4.00	1.35	7.5		緑結晶岩	髪	慶大
13		6~9	3.60	1.90	6.0		蛇紋岩	髪	慶大
14	4 次 A 3	7	5.45	3.70	1.1		緑色片岩	なし	慶大
15	4 次 A 4	7	4.55	2.80	7.5		緑色片岩	なし	慶大
16	4 次 A 3	7	4.15	1.80	6.5		緑色片岩	なし	慶大
17	4 次 A	7	2.95	1.85	3.5		緑色片岩	なし	慶大

も太く深く、乳房の線は細く浅く注意しないと気づかないほどである。下半部は最大幅の位置に 2 本の横線を描いたあと、18 本の縦線からなるスダレ文で完全にうめている。横線は上は鮮明、下は細く頼りない。裏面の下部に入れた×印は肛門の表現であろう。楕円形の磔を下が膨らむようにして天地を決めているので、肥満した女の感じがよくでている。上黒岩の石偶のなかで、もっとも整った形と線刻をもっている例である。表面が少し腐った磔を使っている。

2 は、表面 (a 面) の上半部に髪、乳房、下半部にスダレ文を線刻している。髪は左右に分けて両乳房の上に垂らしており、U 字形の下端近くまでおよんでいる。中央やや下よりの横線の 1 本は鮮明、のこりの 2, 3 本は不鮮明で、そのうえに 20 本の縦線からなるスダレ文を彫っている。上から 2, 3 本目の横線は、決定線ではなかったのであろう。縦線の本数が多いのは、彫り直しの意味を含んでいたからかもしれない。この石偶はさらに裏面 (b 面) の中央にも、横に直線 1 本をいれ、その下に鋸歯文を 3 本横方向に並行して彫っている。上から 3 本目の鋸歯文は、かなり下に寄っている。上半部にみえる 1 本の縦線は髪の一部かもしれない。裏面は表面とくらべるとやや凹面で全体が磨滅しており、線刻は不鮮明である。使用により現在の裏面が磨滅して不鮮明になったあと、ひっくり返して表面に新しく線刻したと推定する。

3 は、左側の乳房は観察できるが、右側は観察できない。髪の毛もまったくみえない。真ん中より少し下に横線をいれて、約 10 本の縦線からなるスダレ文を彫っている。

4 は、ほぼ中央に横に 1 本の線をいれ、そこから 8 本内外の縦線からなるスダレ文を下半部に彫っている。上半部の上中央の縦線も、1 本だけでは髪の毛かどうか判断できない。線刻はまばらで拙く、浅く細い。石の形は悪く、表面の状態もよいとはいえない。

5 は、4, 5 本からなる左右の髪の毛の線刻は中央よりも下までおよび、太く深い。線刻は緑の斜面から始まり平たい面におよんでいる。下よりの最大幅の位置に鋸歯文 2 本を並行して彫っている。





图 207 石偶放大写真 (×2.5)

この線刻は細く不鮮明である。裏面の下部には×印を入れて、肛門をあらわしている。左下縁は古い欠損である。乳房をあらわさず、鋸歯文をもつ石偶のなかで、整った形と線刻をもっている例である。

6は、それぞれ4本からなる二つに分けた髪の毛を中央より下まで長く伸ばしている。下半部の下よりの位置に鋸歯文を2本描いている。線刻はきわめて浅い。髪の毛の線刻は上端から始まっており、左側の線刻は左利きの人でないと施せない。上端裏面の打撃による欠損は古い。

7は、左右それぞれ4本からなる二つに分けた髪の毛をほぼ中央まで下ろし、その下に2本の横方向の鋸歯文を彫っている。線刻は細く浅く、特に鋸歯文は著しい。上端は両面ともそれぞれ3回ほどの打撃による小剥離がある。表面が風化した礫である。

8は、二つに分けたそれぞれ4本から成る髪の毛を下まで長く伸ばしている。線刻は深くしっかりしている。腰に相当するところに横線1本をいれ、その下に鋸歯文を2本描いているが、これはきわめて繊細である。高さ3.9cmの小型のわりに整っている例である。裏面の下部にわずかに赤色顔料の付着がある。

9は、髪の毛を左右に分けて上から2/3の位置まで線刻している。左側が7本、右側が4本、その下に横方向の短い鋸歯文が2本かすかにのこっている。左側の髪の毛は左利きの人でないと彫れない。高さ4.4cm、幅1.90cmで小さい。

10は、左右それぞれ4、5本からなる二つに分けたやや乱れた髪の毛を中央よりやや下まで彫っている。その下に横方向に2本の鋸歯文がかすかにのこっている。下端に近いところに水平に3本の不鮮明な線がみえる。うち下の2本の線は2～3mmの長さで確かとはいえない。裏面の下部に赤色顔料がわずかに付着している。高さ3.6cm、幅2.0cmで、上黒岩の石偶のなかでは小さく薄い。

11は、左右に分けた髪の毛だけを線刻している。左右とも5本で、石が硬かったために、直線的に彫ることができず、何回も修正しながら彫り上げている。線刻は上端が太く中央になるにつれて細くなっており、上から下に向けて線刻したことが明らかである。下半部には線刻はない。石の幅が広いほうを上にしており、石の取り方が他とくらべると逆である。裏面はやや凹面である。裏面右縁は新しい欠損である。

12は、上下の幅があまり変わらず、厚さも他とくらべると厚い棒状の結晶片岩で、やや軟質である。石の選び方は、上黒岩の石偶のなかでは趣を異にしている。線刻は表面に髪の毛を左右に分けそれぞれ2本と3本、直線もあるが乱れた線が多く、線刻も浅い。

13は、髪の毛とおぼしい2本の垂線と、あと両面に傷とみてよい不規則な短い線がかすかにのこっているだけである。高さ3.6cm、幅1.9cmで、上黒岩の石偶のなかではもっとも小さく、線刻はもっとも不明瞭である。やや硬質の蛇紋岩。

### 3 無線刻礫の記載

ここで取りあげる線刻のない礫は4点ある（図208、表17）。

14から17は、線刻のないすべて緑色片岩または結晶片岩の楕円形の扁平な礫（長さ5.5cm×幅



3.0 cm, 厚さ 0.3 cm～長さ 3.0 cm×幅 1.8 cm, 厚さ 1.1 cm) である。これらには加工痕は認められないけれども、岩陰の外部から持ち込んだことは明らかである。すべてA4区第7層からの出土であることも、一つの目的のもとに意図的に集めたことを示唆している。

14 は、整った楕円形のやや厚い磔。硬い。

15 は、やや軟質で、石偶の石材にもっとも近い。下部を横切る線は石の脈である。

16 は、やや細長い楕円形の磔である。線刻がないだけで、形や石質は5に似ている。

17 は、下方がふくれた楕円形の小さく薄い磔。裏面は不規則な凹んだ線が縦に走る。

石偶は利器ではないだけに、4・12・13のようなものでも使用に供されたとすれば、最後は線刻がなくても、あるいは石の表面に図像をのこすほど強く彫らなくても、石偶と信じる事ができれば、彼らはそれでよかったのではないだろうか。これらの線刻のない磔も、石偶と同じように使用された可能性を考えていきたい。

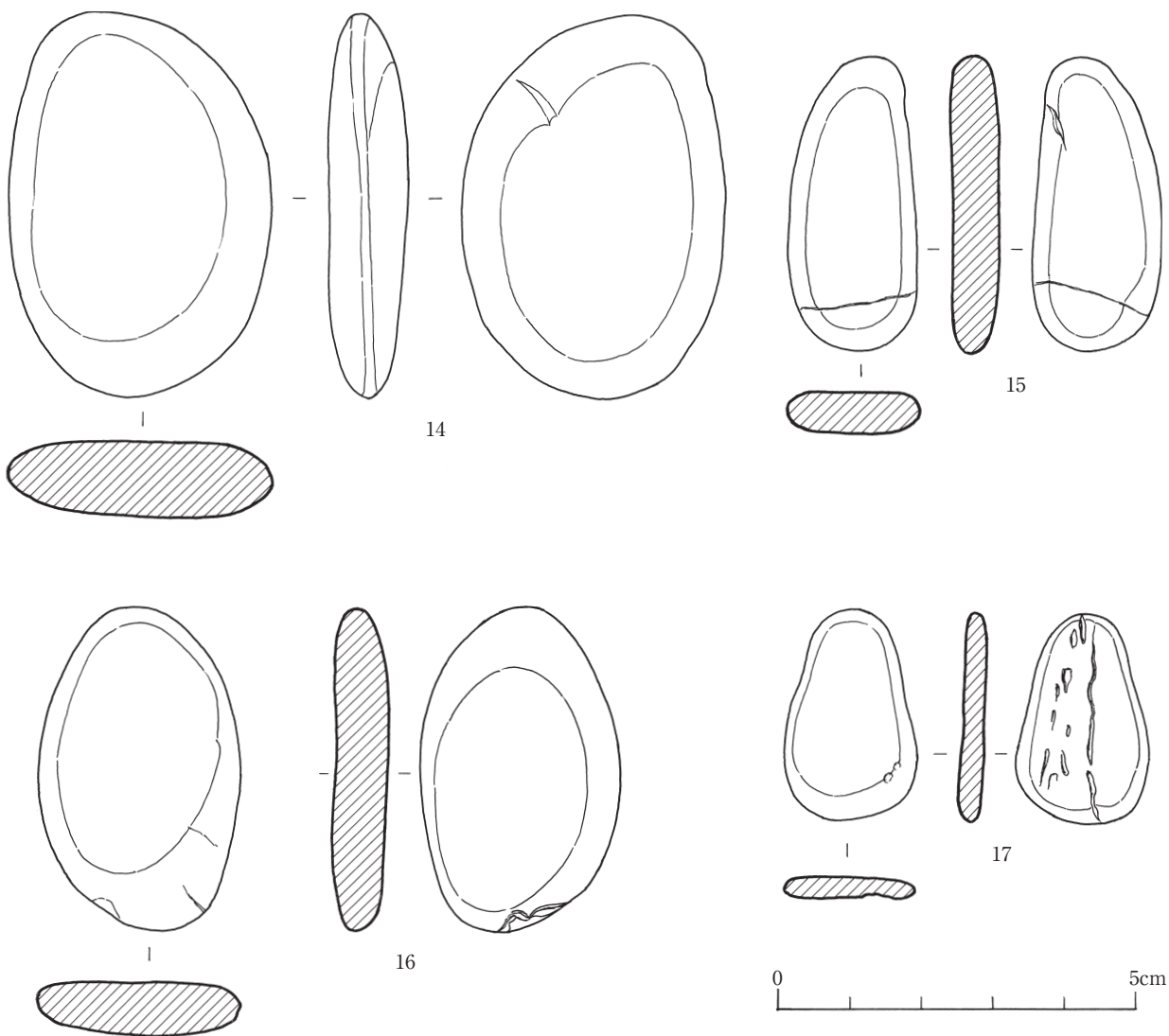


図 208 無線刻磔

#### 4 棒状線刻礫の記載

線刻した細長い棒状の礫は3点ある（図209・210、表18）。

1は、断面が楕円形の大型の棒状の自然礫（長さ25.1cm、幅6.2cm、厚さ2.6cm、重さ860g）の片面に連続羽状文または連続鋸歯文を線刻したものである。石材は、表面の風化が進んでいないひじょうに硬い緑色片岩である。一端の両面に敲打による顕著な剥離痕があり、もう一端にも軽微な敲打痕があるので、最後は敲打石として竖杵状に使ったのであろう。以下、剥離痕をもつ端を下に

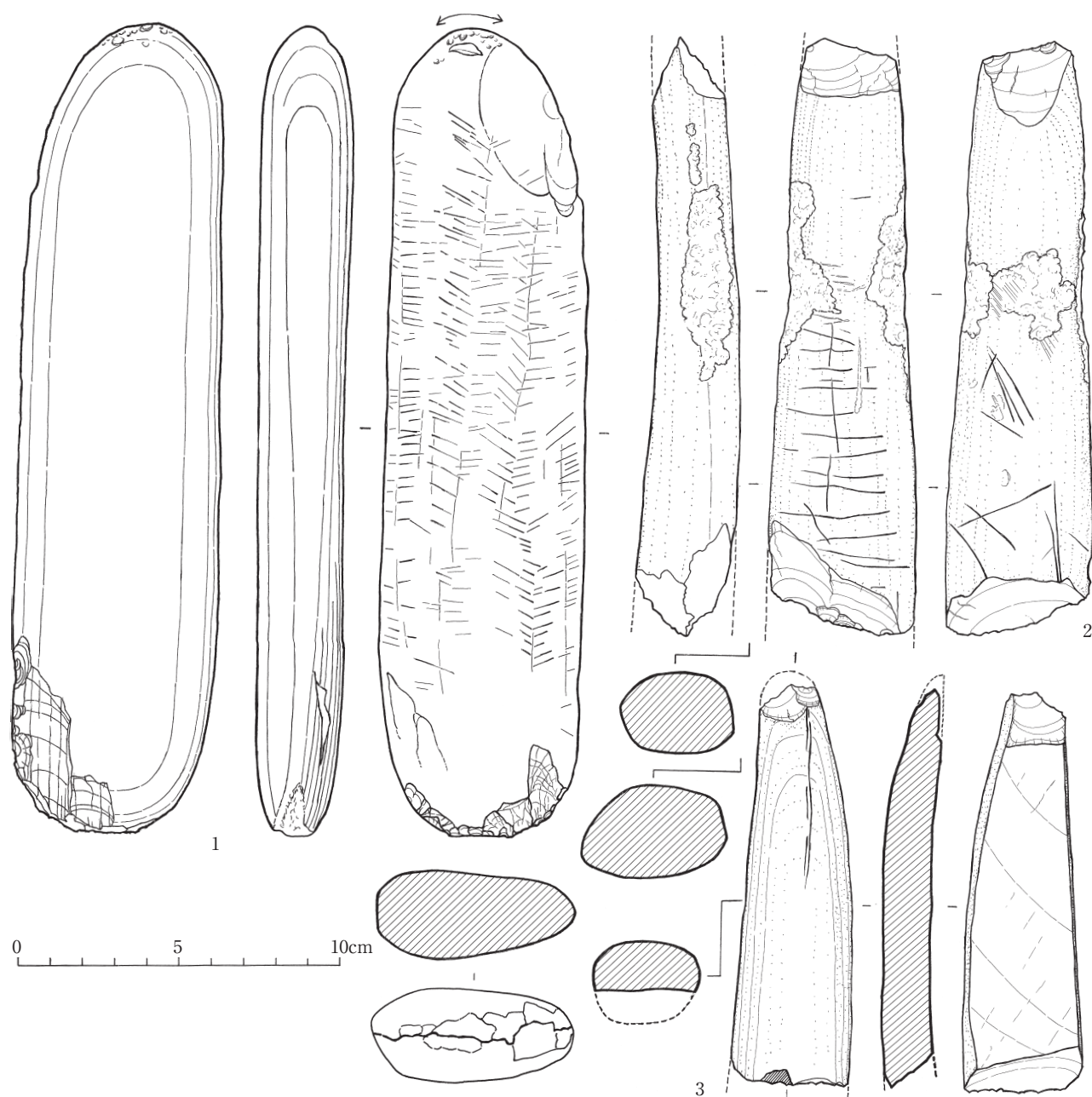
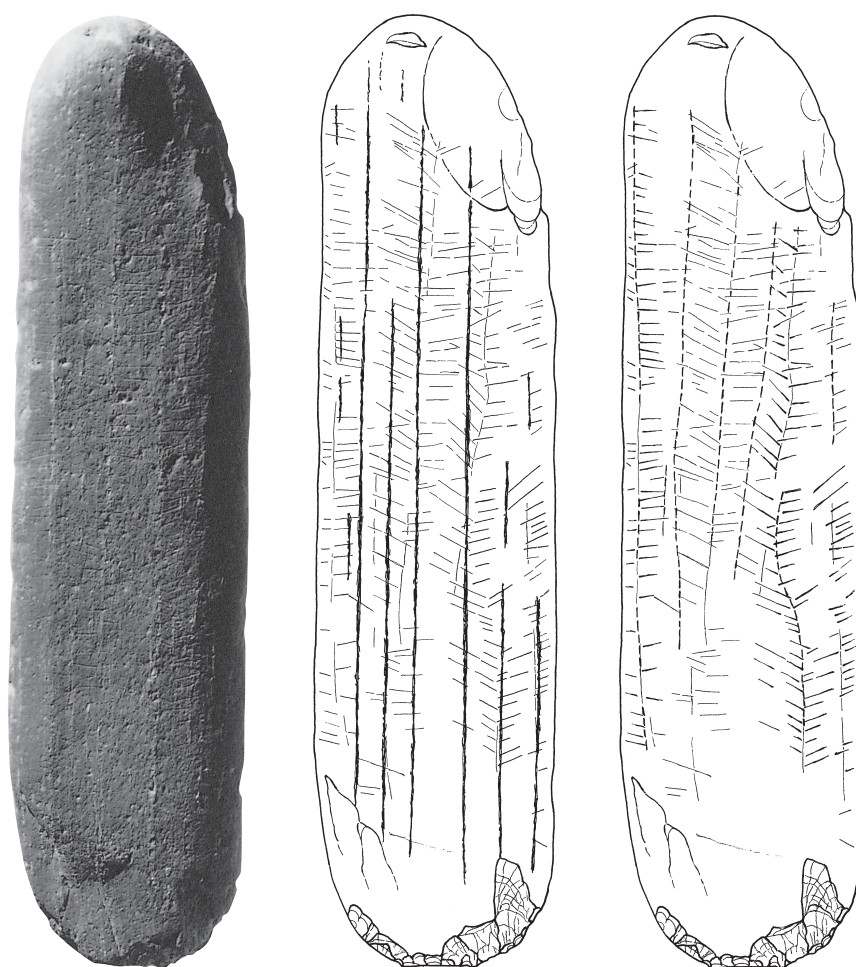


図209 棒状線刻礫（×1/2）



おいて説明する。石は、長い棒状で1端が斜めになっているので一見、大きな男根形に見えるが、外形は表面の研磨などの加工はいっさいしていない。石の片方の面は平坦、もう片方の面は丸味をもっている。線刻は、平坦な側を選んで両端をのぞくほぼ全面に、長軸に直交するように多数の短線を連ねた帯状の列を縦に計7本並べて羽状文を構成している。両端に線刻がないのは、平坦な面がそこで終わり斜面になっているので、やめたということであろう。

線刻の状況は、短線の1列目は右下がりないし水平、2列目は水平ないしわずかに左下がり、3



1 石英脈と線刻

2 羽状文の基準線

図 210 棒状線刻礫の線刻状況 (×1/2)

表 18 線刻礫一覧表

番号	調査区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	線刻	保管
1	2次D区	6	25.1	6.2	2.6	860	緑色片岩	連続羽状文	久万高原町
2		7～6	18.45	4.54	2.95		緑色片岩	樹枝状	慶大
3	2次1トレンチC	9	12.5	3.75	1.6	141.3	緑色片岩	直線	慶大

列目は右下がり、4列目は水平、5列目はつよい右下がり、6列目は左下がり、7列目も左下がりになっている。列と列の境付近には、ところどころに長さが4～8 cmほどの細い縦線がはいっている。短線を彫るときを目安の線にしたようである。しかし、この棒石には長軸方向に白い石英脈の線が幅1.5 cm間隔で通っており、それも基準線として利用していながらも、その線からしばしば逸脱しており、そのために、この縦線が必要になったようである。それぞれの列は短線の左側のラインが揃っているので、原則として左側から右側へ彫る道具の先端を動かしたのであろう。しかし、5列目と6列目の中央付近は棒の長軸から左へかなり振れており、下付近で振れを修正している。振れの原因は、そこで線刻の方向を変えたことにあるらしい。おそらく、線刻をしやすいように石の位置を適宜にかえながら作業したために、このような乱れが生じたのであろう。線刻は基本的に左側から右側に向かって1列ずつおこなっていったようであるが、斜面にかかっている1列目は、2列目よりも遅れて線刻した可能性がつよい。

石材はひじょうに硬いようにみえるにもかかわらず、1本1本の線は断面V字形の葉研彫りでススッと彫っており、同じ線を2回、3回となぞるようなことはしていない。刻線の断面は楔形を呈しているため、本遺跡の打製石器の材料である鉄石英やチャートの剥片では、先端がすぐに潰れてしまい、このような線刻は困難であろう。高知県西土佐村大宮遺跡では縄文後期の線刻礫に先端が磨滅した水晶片を伴出したというから、彫る道具は水晶であった可能性がある。D区第6層から無文土器と伴出した。

2は、断面が楕円形の棒状の石（長さ18.45 cm、幅4.54 cm）の両面に線刻したもの。線刻は、a面では長軸中央に縦に断続的に1本の線を彫ったあと、それと直交する長さ3 cm前後の直線15本を交差させて木の枝状にしている。b面では、太いほうの基部付近にコ字形の線刻を施しているほか、不規則な線を数本彫っている。刻線はひじょうに細い。線刻後に両端に両面から打撃を1回ずつ加えて刃部を作り、両刃の礫器に転用しており、そのために線刻の一部は失われている。本来の長さはおそらく22 cm前後あるひじょうに細長い棒状の礫を選んでいたのであろう。また、両側面および正面の中央付近を敲石として使ったために打痕をのこしており、特に両側面は大きく凹んでいる。緑色片岩製、第7～6層からの出土である。第7層ならば第9層に近く、第6層ならば1と同じ時期になる。縦に線をひいたあと横線を彫るという線刻のあり方は、1に近いといえる。

3は、小型で蒲鉾状の石（長さ12.5 cm、幅3.75 cm）の自然面に中軸線にあわせて細い線1本と、それに接して並行する1本の線を断続的に彫っている。刻線はひじょうに細い。線刻後に縦に半截し、長軸の片端に両面から計3回の打撃を加えて粗く剥離し、もう1端も1回の打撃を加えて折った状態になっており、両刃の礫器に転用している。本来の長さは15 cm以上あったのであろう。緑色片岩製、第9層からの出土である。

## 5 小 結

以上のように、上黒岩の石偶は、上半部に髪の毛、乳房、下半部にスタレ文または鋸歯文、そして肛門まで表現しているものがある一方、髪の毛を線刻しただけのものもある。高さは6.3 cmから3.6 cm、幅は3.8 cmから1.3 cm、厚さは7.5～3.4 mmの非常に薄いもので、本当に小さな石

偶である。

石偶と同じ緑色片岩や結晶片岩の円礫は、上黒岩岩陰の前を流れる久万川で採取することができる。しかし、それらの円礫は、円礫同士がたえず接触し動いているために、表面はつねに新鮮で硬く、カッターナイフを使っても細く浅い線を彫ることしかできない。また、上黒岩岩陰の石偶の礫は厚さが5, 6 mm前後で薄く平たいのが特徴であるが、このような円礫を久万川で見つけることは容易でない。石偶に用いた礫を観察すると、表面が風化してやや軟質に変化している。上黒岩の石偶の髪の毛のような太く深い線を彫る工具は、水晶の先端やチャートの剥片などであろうから、表面が風化して泥質に変質した礫でなければ線刻は困難である。おそらく上黒岩の周辺に久万川が古い時期に形成した礫層の露頭があり、そこに出かけて適当な大きさ、厚さをもつ表面の軟らかい礫を選んで採取してきたのであろう。

線刻するときは、楕円形の礫を縦に長くにとって、幅がせまいほうを上、広いほうを下にもってきて、上半部に髪の毛、下半部にスタレ文または鋸歯文を線刻するのが普通である。1のように、楕円形の大きな膨らみを下にもっていったら、線刻しただけで、豊満な女をあらわすのに成功したような例もあるが、多くの例ではそこまでは石の選択にこだわっていない。

線刻は、幅が広く深いものから、細く浅いものまでである。後者のなかには、線刻が否か判定しにくいものまで含まれている。3の片側の乳房は、本来表現していなかったのではなく、きわめて浅かったために表面の風化によって消滅してしまった可能性もある。

上黒岩の石偶の線刻には、髪、乳房、スタレ文または鋸歯文、肛門を彫った個体から、髪だけを彫った個体まである。これらを、線刻の複雑なものから単純なものまで配列して比較してみると、単純な表現であるために、それだけでは何をあらわしているのか不明のものでも、髪や「腰蓑」の表現であることを容易に判断することができる。さらに、長さや「腰蓑」の位置など、線刻に時間的な変遷を想わせるような変化を看取することが可能である。

どの個体にも共通して存在する線刻は髪である。そして、髪は左右に二つに分けて垂下するように直線的にあらわしてある。

乳房の表現は、U字形を二つ並べている。3の乳房が一つしかないのは、もう一つは線刻が浅すぎて痕跡をのこさなかったのかもしれない。しかし、乳房の表現があるのは13点のうち3点にすぎない。

1・2の石偶の下半部の縦方向のスタレ状の線刻は「腰蓑状の衣類を表現」していると解釈されてきた[江坂ほか1967:232]。今回あらたに報告する3と4にも同様の線刻がある。筆者は、第4部第6章で詳しく述べるように、横の1本線と下半部の輪郭線とによってできる半円形（あるいは逆三角形）は「性的三角形」sexual triangleを意味し、スタレ状の刻線は陰毛をあらわし、全体は女性器を表現していると解釈する。

また、5の石偶の髪の毛の下に位置に横方向に彫ってある2本の鋸歯文も、下半部にあることから、スタレ状の線刻と同様に「腰蓑」とされてきた。今回の報告では、2の裏面と5～10がそれに相当し、2と8の例では、1本の横線をいれたあと2、3本の鋸歯文を横方向に線刻している。スタレ状の刻線を「腰蓑」とするのであれば、2～3本の鋸歯文は横方向で幅がせまいので、丈が短い「腰巻」の可能性を考えたくもなる。しかし、スタレ状の刻線が陰毛ひいては女性器をあらわ



---

しているとすれば、鋸歯文もスタレ状線刻に代わる女性器の表現と解釈したほうがよいだろう。第6層出土の大型石棒状の線刻礫の片面のほぼ全面うめつくしている羽状文も、鋸歯文を連ねた文様であるから、鋸歯文の意味を解明していくことは重要である。

裏面の下端近くに×形を線刻しているのは2点だけである。肛門の表現と考えてよいだろう。省略が進んでいる上黒岩の石偶にわざわざ肛門をあらわしているのは、人の生理器官として肛門の存在を重く見ていた証拠であろう。

石偶5点は、第2・3次調査時にD1, D2, D3, D4区の第9層の同一平面から有茎尖頭器、礫器、「扁平な川原石」とともに見つかったので、この付近が「当時の一つの住居跡」と調査者は想定している〔江坂ほか1967:229〕。D区は上黒岩岩陰の西端、すなわち岩陰では久万川にもっとも近い位置にあたる。石偶はなんらかの遺構に伴ったものではないが、それを使った空間がこの付近にあったことは確かであろう。

(春成秀爾)

---

#### 註

(1)——石偶および線刻礫の観察と実測は、綿貫俊一と春成による。

---

#### 参考文献

江坂輝弥・岡本健児・西田 栄 1967「愛媛県上黒岩岩陰」(日本考古学協会編)『日本の洞穴遺跡』224～236頁, 平凡社。